

「生死を分ける「備え」」

宮城県 登米市立佐沼中学校 3年 盛<sup>さか</sup>航<sup>わたる</sup>

広島市で発生した大規模な土砂災害から1年が経過し、亡くなった方々の氏名を刻んだ慰霊碑が建てられるなど、この土砂災害を風化させず、後世へ伝えようとする取り組みが数多く行われています。

この土砂災害では、74 名の方々が命を落としました。これは、日本で過去 30 年間に発生した土砂災害による死者数として、最も多い記録となりました。

では、なぜ、これほどの死者を出すことになったのでしょうか。

この土砂災害による死者のおもな死因は、「窒息死」つまり、「生き埋め状態になった」ことです。さらに、「生き埋め状態になった」ということは、「逃げ遅れてしまい、何かの下敷きになった」と考えることができます。

詳しく当時の状況を調べたところ、これほどの人が逃げ遅れた要因が分かってきました。

土砂災害が起きた広島県には、もともと、全国で最も多い 31,987 箇所の「土砂災害危険箇所」が存在しています。また、広島市は 1999 年に、豪雨による被害を受けているため、それから得た教訓なども持っているはずです。

そのような中で、土砂災害が発生した 8 月 20 日を迎えます。その日は、未明から1時間に 100 ミリを超える猛烈な雨が降っていました。そして、午前2時過ぎから、広島市内各地で土石流などが発生しはじめます。しかし、なぜか避難勧告は午前4時半ごろになってから出ました。

この「避難勧告の遅れ」が、死者の増加の一番の要因だったと考えられます。

しかし、市がすべて悪いというわけではなく、住民の防災意識が低かったのも、少なからず、事態の拡大につながったのだと思います。

この土砂災害は、広島県で起こったものではありませんが、だからといって、ほかの地域の人とは他人事として扱って良いのかと言ったら、そうではありません。

政府広報によれば、昨年は 1,084 件もの土砂災害が起きたそうです。過去 10 年間の年間の発生件数の平均が 1,000 件ということですから、昨年は件数が例年より多かったことがわかります。

そして、国土交通省の資料によれば、昨年は滋賀県を除くすべての都道府県において、土砂災害が起きているそうです。広島はその一部に過ぎなかったということがわかります。

決して他人事とは言えなくなってきた土砂災害。では、私たちは防ぐことのできない土砂災害にどのようにして備えれば良いのでしょうか。

まず、「自分のいる都道府県を知る」ことです。自分のいる都道府県は、土砂災害が起こりやすいのか、そうではないのか、国土交通省のホームページなどで確認したり、自分のまわりがけや斜面などの土砂災害が起こりやすい場所があるか点検したりするのが、土砂災害に対する備えの第一歩だと思います。

次に、土砂災害に限らず、非常時への備えとして、必需品を入れた「非常持ち出し袋」を玄関などに置いておくなど、「万が一の場合でも、すぐに避難できるようにしておく」ことです。家族内で避難場所を決めておくのも、これに含まれる、大事なことです。

そして、「気象の変化に敏感になる」ことです。土砂災害の危険性が高まっている場合には、都道府県と気象庁が共同で「土砂災害警戒情報」を発表することになっていますが、広島のような、発表が遅れることも十分に考えられます。ですから、猛烈な雨が降っていたり、異常な音が聞こえたり、亀裂が発生したりしているなどの現象が見られたときには、警報の有無に関わらず、自主避難するようにして頂きたいと思っています。

「明日は我が身」ということわざがあるように、土砂災害はいつ、どこで起きるかなどを予測することはできません。もしかすると、今すぐにでも起こるかもしれません。

だからこそ、日頃からの備えがとても大切なのです。「結局はそんなことか」と思われるかもしれませんが、でも、土砂災害が予測できないものである以上は、「日頃の備えを万全に」としか言えませんし、それ以外に何もできることはありません。

また、「備えは大切と言うが、実際は無意味」と言って、何の備えもしない人がいます。おそらく、そのような人は、何かあってから、自分が苦しい思いをし、「しっかり備えておけば」と後悔することでしょう。

「備えること」は、土砂災害のみならず、すべての非常事態に通じる大切なことです。非常時に初めてそれに気づくのでは遅いです。

広島は惨事を機に、もう一度、各自で「備え」を確認してみたいと思います。